

くる
ま
木子
の
歌

水上 勉

婦人公論読者賞

脊椎破裂の障害児を子にもつ夫婦
の苦悩とその心理的葛藤、強靱な
母親の愛のすがたを、著者自らの
深刻な体験を通して描く異色長篇

中央公論社

価630円

中央公論社の文芸出版

男色（だんじき） 水上 勉 哀しき性ゆえにおくる男過雅美の流転の人生を精細に描破して、その特異な世界に人間探究の筆をふるう異色長篇 536円	狩野芳崖 水上 勉 欧化全盛の時代に日本画の伝統を守って苦闘する画人の生涯を描く書下し戯曲「狩野芳崖」（前進座上演）ほか一篇 580円	秘密 平林たい子 精薄児とその肉親が背負う救いのない現実を乾いた筆致で描く「秘密」と「熊」など名作十四篇を収める異色の作品集 550円	新・東海道五十三次 武田 泰淳 のんき者の（私）とハリキリ根のユリ子さんがくりひろげる弥次喜多直中現代版！ 名作見学に、喧嘩、事故…… 460円	ミンドロ島ふたたび 大岡 昇平 俘虜となって奇蹟的に生還した著者が現地を再訪して描く長篇「ミンドロ島ふたたび」のはか戦争体験の珠玉四篇 536円	出雲の阿国〈全三巻〉 有吉佐和子 桃山文化が生んだ天下一の踊り手、歌舞伎の創始者出雲の阿国の生涯を、全力を傾倒して描き上げた記念碑的大作 各483円	骨餓身峠死人葛ほねがみとうげにんとけかすろ 野坂昭如 魔坑に描く近親相姦の地獄園の中に異常な美を追求して衝撃を手える野心作「骨餓身峠死人葛」ほか六篇の最新作品集 550円	天馬賦 石川 淳 精妙な手法と自在なイマジユで、ゲバルトの論理を展開する表題作に、石川文学の精髓を伝える新作七篇を取録 750円
--	---	---	--	--	--	--	--

くるま椅子の歌

繪 題 装
字 字 幀
水 田 朝
上 代 倉
直 光 攝
子

病院へゆく坂道は櫟並木だった。葉の混んだ枝が土塀の上から黒い陰を落としていて、アスファルトの白い道は陰の中へ吸われるように病院までのびていた。

この坂道の光景を、美弥子は好きだった。冬は、すっかり葉が落ちて、針のようにとがった梢が、寒々した線画を描いてみせていたけれど、四月がくると、一日のうちに新芽がふき出た。葉が混まない五月は、空の透けてみえる薄緑にぬりつぶされて、坂道は淡彩な色に染まるかと思われた。

坂道を登る美弥子の日々の気構えは、眼にうつる景色の色に出ていたといえた。六月にはまだ、美弥子は希望に胸をあふれさせて、眼をかがやかせていた。週に一度、美弥子が通う時刻に、グレイのタウナスで送られてくる三十二、三歳の妊婦がいた。中流以上の家庭の婦人だと思われたが、丸顔の愛くるしい白い顔が、美弥子には好ましく見えた。つい口をきかずじまいに終わったが、美弥子にはその女のこと鮮明に残っている。運転してくるのは夫とみえて、三十四、五歳のネクタイをきっちりしめた細面のすらりとした男だった。一目でそれとわかる臨月ちかい腹をつき出した婦人が車からゆっくり降りると、夫はにっこり見送って、木陰のモータープールへタウナスを廻りこませてゆく。婦人の帰りを待つのがあった。美弥子も婦人のうしろから階段をあがったが、待合

室で向きあつても、どちらからともなく親しげな眼ざしをおくるだけで、口はきかなかつた。美弥子の腹も、その婦人と同じぐらいの大きさだつた。見知らぬ人に微笑をおぼえたり、坂道の青葉のかげりに興味をもったりすることは、美弥子にとって珍しいことだといえた。じつさい美弥子は、内気で、だまりがちで、臆病で、はっきりしないような、控え目すぎるころがあつた。いつも、夫の要助から「お前は陰気な奴だ」といわれつづけてきた。それが病院へくるようになって、少しずつ変わつてきている。

「丸顔のね……とつてもかわいらしい奥さまなの。あたしよりは、一つ二つ上かも知れないけれど、美しい奥さまなのよ。初産だわ、きつと」

美弥子がそんなことをいうと、要助は、美弥子のいつもとちがう眼の輝きを不思議そうにみて、「初産だつてことが、どうしてわかるのか」と訊いた。

「お腹をかかえるようにして階段をあがるのをみたわよ」といった。陽気に美弥子はいったのだった。「そりゃ、あたしにだつてわかるわ。おかしなものよ、経産婦は、どこか物馴れてるわ。待合室にいても、たばこ喫つたり、何やかやおしゃべりしたりして……なんでもない顔してるけど、その人とあたしだけはちがうのよ。どことなく、不安な、それでいて嬉しいような、……初産の女だけがもつてる表情よ」

「へえ」と夫は感心したように美弥子をみていた。美弥子も九ヵ月ころまでは階段をあがるのに、つき出た腹を抱くようにして上つたものだ。医者がエレベーターにのるよりも、しずかに歩くことをすすめたせいもある。医者にいわれたとおりに美弥子は足をひきずるようにして歩いてあがつた。その婦人も、医者の言いつけを守っているように思えた。

胎児の動きはそれほど変化はなかつたが、わずかな出血があると美弥子は心配になつたので、要

助の出張との関係もあって、入院を早め、すぐ九州から老母をよんだ。

要助が出張前に病室へきた時に、「やっぱり、あたしの方が早かったわ……」といった。要助は、「誰のことか」ときいた。

「タウナスで旦那さまに送ってもらつた奥さまのことよ……丸顔の」と美弥子はいった。

要助は、この時も、美弥子が希望にあふれた眼をしていたことをおぼえている。

美弥子の入院は、予定日より五日早かっただけである。まず、順調といつてよかった。しかし、病室に入ってみると、美弥子は心細くなった。それは初産者特有の不安と怯えだけではなかった。お腹の子が、逆さにすわっていることへの恐怖だった。母のまさは、豊島区の家に入ったん荷を下ろしてから病院へきてくれたが、満員列車で疲れたといい、めっきり老けた蒼白い顔をしばばせながら、まめまめしく美弥子の身を気づかってくれるけれど、どことなくみすばらしく、美弥子は、久しぶりに見る母の姿も、心細く思えるのだった。

「いまは、いろいろな機械もあるけん、逆子じゃちゅうて、心配するこたアないわ。門前の立花の若嫁も逆子じゃったけん。うんでも、産婆のお米さんが、樂うに取りあげんさったわ。こげん大きな病院じゃけん、設備も整うととじやろう、なーんにも、心配はいらんわ……」

まさは、ベッドの下にある畳一枚ぐらいの付添用の寝台に、着換えやら、新しい産衣やらをひろげてみせた。

「どげんかげんで……逆子にしてしもうたんかえ、……医者がわからんかったかなア」

まさは、そういつて溜息をついたのであった。

美弥子はだまっていた。美弥子にいわせれば、たしかに、医者 of 怠慢もあったようである。冬から診察に通いはじめて、四月末に、逆子だということがわかったのだが、それから医者は、腹部マ

ッサージによって、胎児の位置を換えようと試みたらしかったが、やがて、逆子のまま産んだ方がいいと投げやりなことをいうのだった。いや、医者にしてみれば、決して投げやりにはなかったのだが、美弥子にはそのように思えたのだった。

しかし、美弥子は、医者を信頼していた。知人の中に逆子を無事に産んだ者があった。わざわざ、この秋野病院をえらんだのも、その知人の経験を知っていたからである。万一の場合を考えて、美弥子はその知人の紹介でこの病院に通った。先輩の経験からの安心感があった。ところが、いざ入院すると、不安は大きくなった。

「社長に頼んでみたらね、……飛驒だけで、越前の方はあとにしろ、子が生まれてからにしてくれるっていうんだ。……だから、今晚の夜行でおれは、とにかく岐阜へゆくが、五日したらもどってくるよ。それまで、まだ、腹の中にいてくれるといいな」

まさか病室を出たとき、要助は、す早く毛布をめくると、手をのべて美弥子の腹を撫でた。六月は、飛驒や越前の山家で山繭がとれる季節である。山の樹々の枝に野生の虫が繭をつくる。その繭からとった糸で織った紬類を買い集めて販売する要助の会社は、日本橋にあった。商売柄、要助は出張が多く、美弥子は、出産の日に夫が病院へきてくれることなど、あてにはしていなかった。しかし、いざ、その夫が今夜出発するときまると、心細かった。

「いいわ。心配はいらない。お医者さんも、安心だというしね、いざというときは切ればいいんだから」

美弥子は夫の手の感触を快くうけとめながら、自分に言いかけすようにいった。
「切る？」

要助は眉をしかめた。盲腸の手術だったことのない美弥子の腹は、産み月の今日まで、白い

餅肌をみるような、きめのこまかさだった。しみ一つない肌だった。夫は、美弥子の腹がこの上もなく美しいといい、妊娠してから毎夜のように撫でさすってくれていた。

「切らないでほしいな」と要助はぼつんといった。

「そりゃ、あたしだって、いやだわ。……傷の残るのなんかいやだわ。……でも最悪の場合をいつてるのよ。……そんなことないわよ。大丈夫。あたし……うんと、ふん張って……産むから……大丈夫。あんたの子だから、元氣にとび出してくるわよ。安心していつてらっしゃい」

要助は、強いて安堵したような顔をつくった。夕方まで病院にいたが、暗くなりかける頃に、義母にあとのことを頼んで出ていった。そのまま夜行に乗るのであった。美弥子は、右肩下がりの夫のうしろ姿を、ドアのカーテンをまくって見送る母の肩越しにみていたが、このとき無性に淋しかった。眼に涙がにじんだ。岐阜に出て、飛驒の高山から庄川の上流の村々へゆくコースは、毎年のお話のたねである。それらの村々は、夫の会社と交渉が深くて、夫は、貧しい村々の老人たちから、春の便りのように歓迎されるのだといった。その季節がきていた。

2

陣痛が始まったのは、その夜、八時すぎである。美弥子は初め、それが陣痛とは思っていなかったが、やがて胎児が下方へずり落ちてゆくような激痛をおぼえるようになった。下腹のあたりが、きりきりと揉むように痛くなった。美弥子は声をあげた。ベッドの下に寝ていたまさは、しょぼついた眼をこすりながらも、すぐに起きあがった。時計は二時を示していた。

「どげんした、痛むか」

「何かしらん、ぐれぐれと痛いわ、母ちゃん、看護婦さん、呼んできてえ」

美弥子は、思わず九州訛をだして叫んでいた。廊下のはす向かいにうす暗い電燈のついている当直医の室がある。まさは、寝巻きのままで走っていったが、そこには誰もいなかった。夜は宿直の医師がいるはずであった。横文字や人名が書かれてある黒板が壁に掛かり、よごれたデスクが二つ向きあって置かれてある。いつもなら、白い診察着をつけた若い医者が坐っているはずであった。

この秋野病院は産科専門ではない。内科、外科、小児科、神経科、耳鼻咽喉科と、それぞれの科が、四階建ての三棟の病棟に分かれていた。産婦人科のある第一病棟の中には内科もあった。二階が産婦人科で、美弥子の病室の真向かいに新生児室があり、当直室をへだてて、分娩室、準備室がある。廊下の片側の病室は、ハモニカのように戸口をあけ、むし暑い廊下に淡い光を投げていたが、真夜中でも、誰もがドアをしめず、それぞれカーテンをたらして風を入れているのであった。まさは無人の深夜の廊下をみて途方にくれた。まさは新生児の部屋をのぞいた。そこには、三十にちかい小さなベッドがならんでいた。端から順番に番号札がつけられていて、うす暗い灯の下に、いま十床だけに新生児が毛布にくるまれてすやすやと寝ている。

背のひくい田舎娘まるだしの心もとない十七、八の看護婦が、検温器をふりながら部屋を横切ってくるのにまさは出会った。

「先生はどこにおいでなさいますか」

看護婦は、まさをみてこたえた。

「ただ今、診察中です」

急ぎの用でもあるのか、立ち去ろうとする。

「先生にいうてください、陣痛が起きたんです、七号室ですが……」

まさは必死になっていった。看護婦は、七号室のカーテンの前まできて、カーテンをまくってみ

ただで、中まで入らずに、美弥子にきいた。

「痛むのですか」

美弥子はこたえなかった。

「はい、痛いちゅうとります。予定日は五日後じゃけど、本人は産まれるようじゃというとりますけん……先生に……せひ、そげえ、いうてください」

まさは、看護婦の冷たい眼にぶつかって、しょぼついた眼がにわかに醒めた。美弥子はベッドの上で、腹をおさえていた。苦しいのであった。

「いま、先生がきて下さるけんな」と、まさはいった。

美弥子の顔に脂汗がながれた。激痛は間をおいて襲ってきたが、次第にその間隔は短くなっていた。腹の皮のつっぱるような痛さではなくなり、内部の奥の方で、大きな胎児がゆれ動く痛さだった。それは胎児が向きをかえているかもしれないと思えるほどであった。激痛がきたらすぐ知らせるようにと医者にもいわれていたから、美弥子は気が気でなかった。まさは、廊下へ出て、おろおろしていた。五分ほどすると、坂巻という若い医者が、先ほどの看護婦をつれて早足で現われた。

「痛みますか」とききながら、坂巻は美弥子の顔をみた。

坂巻は美弥子の額にふくらんでいる静脈と、おびただしい脂汗をみとめた。軀を横にしていた美弥子は、痛みに耐えて顔を歪めている。と、医者は、美弥子の軀を仰向けにした。診察のときのように、膝を立てさせて、心もち股間をひらかせると、毛布をめくって局部の所見をはじめた。美弥子は夢中であつた。必死に激痛をこらえているだけであつた。うす暗い灯の下で、若い医者は美弥子の股間をじっと覗いていたが、やがて、てのひらを恥毛の上から腹のふくらみにかけてずらせつつ、やわらかく押してみた。

「もう少し様子をみてみましょう。いちおう分娩の用意をしておきますが」と医者はいった。

この坂巻という医者は、平生から必要以上に落ちついてゐる風に見えた。しかし、美弥子には、坂巻が子供供してみえる日もあった。童顔なので、まだ学生のような気がして、不安なのであった。秋野病院には、豊田秀彦という、T大の産科でならした老教授が産婦人科長をしていた。美弥子は逆子を無事産んだ知人から紹介された時、この学界の泰斗の名をきいた。しかし、豊田科長には、美弥子はたった五回しか診察をうけていなかった。豊田は、十時から三時までの診察時間を終えると、すぐ病院を出るのだった。そのあとは、高見という四十年輩の医師が責任をもっていて、坂巻、戸田、三上という若い医者たちが、高見を助けていた。これが産婦人科の構成だった。産室は二十ぐらいしかないのだから、医者の数はそれでよかったわけである。あとは、老練の看護婦と、若い見習看護婦たちが交替で産婦や新生児の面倒をみていた。ほかには、この病院専門に通つてくる五十すぎた付添婦が四、五人ぐらいいたろうか。

深夜の分娩は、宿直の医者が受け持つことになっていた。美弥子は、坂巻のつるりとしたにきび一つない童顔が、やがて心もちひきしまつて、「分娩の用意をしましょう」といって決意したように出てゆくのをみて、ああ、やっぱり、自分は、この若い医者の手で、子を産むのかと思つた。それは、この病院で産もうと心をきめたころ、もつとも安心感を与えてくれるであろう老練の豊田博士に診察されながら、ふと、考えないではおれなかったことであつた。いままで、診察を受けに通つてゐる時にも、分娩室へかつぎこまれるようにして入つてゆく産婦たちをみてゐると、若い坂巻や戸田が実際上の仕事を受けている様子なので、いっそ美弥子はそのように思わざるを得なかつた。老教授はこの病院の看板であつて、じつさいは若い医者たちがやつてゐるのだということに気づいたのであつた。産婆でさえ取りあげられる仕事なのだから、老練な専門医でなくても、か

んたんに産むことも出来るのであろう。

「高見先生の姿をみなかったの……母ちゃん」

痛みが少しやんだ時、美弥子はきいた。

「高見先生って、髯面の人かえ」と、まさは不機嫌に訊きかえした。

「髯生やしてなんかいないわよ。白い顔をした痩せた先生よ」

「当直室はからっぽじゃった……」

「きつと……誰か分娩室で産んどられるんじゃろ。……そっちへ行つとりなさるんじゃわ」

母はひとり合点のようにいった。そうでなければ、当直室に医者がいないのは解せないという顔をしていた。何度目かの陣痛は声をあげたいほどの激痛をともなつて、その直後にきた。美弥子はう、うーッ、うーッ、とうめいた。脂汗が鼻をつたつて落ちた。まさは、またおろおろしはじめた。しかし、枕もとへ寄つて顔の汗を拭いてやつた。

「さすつてあげようか」

美弥子はだまつていた。母のさらさらした掌が背中に触れた。それは、夫の手よりも、さらついた荒れた触覚であつた。美弥子は、要助が出張していったことを思い、いまごろはきつと汽車で寝ているかもしれないと、ふと思つた。パンツやランニングなどの下着類だけは、まとめてスーツケースに入れておいたが、ワイシャツの着換えをもつて出たであらうかと、心配になつたりした。その時はまだそのような余裕があつたのだらうか。

「母ちゃんが、お前らを産んだ時はなァ、……やつぱり、門前のお米さんのお母ァが産婆さんをしちよつたが……陣痛がきてから、お父さんが、提灯さげてよびにいつてくれよつたが……えろうおそくてなァ、まだか、まだかと思つて、憎んでおつたがなァ、……産婆がきてから、それでも、ま

だ一時間もかかってから、産まれたものじゃった。……本人は痛いもんじゃけん、いまにも子が出るように思うちよるが……なかなか出んもんじゃわ……」

背をさすりながら母親はいうのである。美弥子は母が二十八歳の時の子である。とすると、いま美弥子は三十一歳だから、母よりも三つ年上の軀で、初産を果たすわけである。

「そら、お母ちゃんは……三人も産んで経験もあつたし、……わたしくらへものにはならんわ」「でも……お母ちゃんは、こげん、立派な病院じゃなかつたで」とまさはいった。

しかし、すぐに、まさは眉をくもらせた。深夜の当直室に誰もいない。娘がいま陣痛を訴えている。不安感が襲うのも無理はなかつた。あの童顔の若い医者にまかせておけば、うまくゆくのだらうか。美弥子の場合は正常分娩というものの、逆子なのである。胎児は臀部から足をたたんで出てくるのだ。

3

気がついた時、美弥子は固い分娩台の上に寝ていた。激痛が襲ってから失神していたのである。失神した美弥子を移動ベッドに乗せて、分娩室にはこんだのは、郡山さちという年輩の背のひくい看護婦と、寺井という、先ほど坂巻のあとに尾いてきた若い看護婦だった。美弥子は、固いベッドの上に仰向けの姿勢で寝かされていた。若い看護婦が腹の上へふわりと白布をかけるのがみえた。いつのまにそうされたのか股を不様にひろげている。左右の両足首を、皮ベルトで締められているので身動きも出来なかつた。

「もうすぐじゃ……心配なか」と耳もとでささやく母の声がした。

美弥子は、その声ではっとしたが、やにわに、また激しい下腹の痛みをおぼえて眼をつぶった。

しかし、それは失神した瞬間の痛みにくらべると、いくらか軽いものだった。美弥子は、股間の一部に冷たい金属物がさわるのを知った。肛門にむかって急にぬるりとした温いものが流れる気がしたのはその直後であった。と、美弥子は、激しい羞恥をおぼえた。若い坂巻医師が看護婦に何か早口で指示している。たたきの上を歩く看護婦たちの足音と器具の触れ合う音がきこえた。

分娩がはじまって、最初に腔口から出てきたのは新生児の鼠茸のような白い片足であった。その足は、一本だけしか出てこなかった。と、美弥子が息を吸った瞬間、いったん出た足はひっこんだ。坂巻は、両手で腔口をひろげるようにした。と、また一本だけ足が出てきた。こんどは、その足にそうて、さらに短いもう一本の足が、茸のような足裏をのぞかせて出た。坂巻は、その足を血のついた指ではさみ、心もち美弥子の臀部を片手でもちあげるようにして、新生児の出ようとするのをたすけた。一本の足が、片方の足にからませたような不格好な姿で、大きく露出した。手を腹にそわせて組んだ子の胸が出たのはそのあとである。新生児は、美弥子の腔の中で、顔をかくしたまま、宙ぶらりんになっているようだった。坂巻の顔に汗が出てきた。何か口の中で郡山さちにいったようだったが、郡山さちは懸命に息張ろうとする美弥子の足を強く抑えているので、聞こえないようだった。と、坂巻は、わきの皿の上から、別の看護婦に命じてす早く鉗を握むと、先端を美弥子の会陰部にそわせて切開しはじめた。鮮血がぼとぼと床に落ちた。坂巻が鉗を置いたと同時に、美弥子の腔口が大きく開いて、ぬれた黒髪を逆なでにされた大きな頭がぼろりと出た。それが新生児の全体であった。

坂巻医師は郡山さちが新生児をガーゼに包んで持ちあげるのを落ちついて所見した。子の臍から管のよりのびていた胎盤との絆をす早く切りとった。

「泣きませんね」と郡山さちはいった。坂巻は新生児の方はみていなかった。のち産といわれる胎

盤の始末に真剣であつたからである。切開部の縫合もしなければならぬ。出血が激しいので手間がかかった。

「先生、泣きませんね」

またビニールのカーテンの向こうから郡山はいった。

新生児は、油紙を敷いた台の上に寝かされていたが、ふつう、産声をあげるはずなのに声をたてないのであつた。というよりも、まったく仮死状態のようだった。手をひくひく動かしているだけであつた。

坂巻は、美弥子の局部の消毒や、汚物の処置を若い看護婦に指示すると、足早にビニールのカーテンをあけて、郡山のわきに走りよつた。新生児を見た。

「なんだ」と坂巻はいった。

いましも郡山さちが、新生児を湯槽につけて、産湯をつかわせようと両手でもちあげた瞬間だった。新生児の背中がくるとこちらを向き、そこに何やらこぶのような赤い腫物がみえたからだった。瞬間、坂巻は、母体から出た血がついているのだと思ひなおした。かなりな出血だったからである。

郡山さちの細面の顔が蒼白になった。新生児は、両手を力なくうごかすだけで、眼をつぶつたまゝ、口から黒い汚物をはきつづけた。泣きもしない。

「先生」と郡山はいった。

坂巻は湯につかっている新生児の足をみた。変わった足であつた。左右内側に彎曲している。くるぶしが内側に向かつて合わさり、爪先だけが直角に横をさしている。

「変ですね」と、ささやくように郡山はいった。

「うむ」

坂巻は、傍の手洗にクレゾールを入れると、血のついた腕をこするようにして洗ったが、まもなくタオルで拭きながら寄ってきた。

新生児の背中をみた。脊椎の下から第三節あたりに、とび出た肉腫がはっきりみえる。それはいま、熟れたあんずのように紫色を呈していた。

「脊椎だな」と坂巻はいった。「破裂しているんだ……」

困った子を取りあげたという色が顔に出た。と、その分娩室の隅へ、にゅっと顔を出したのは、まさであつた。

「先生……五体そろうて……おりますか。……男の子ですか……女の子ですか」

「女のお子さんですよ」と郡山がまさの言葉をひきとるようにしていった。「ちゃんとしたお子さんです、安心なさいまし」

そういつてから、かん高い声で、郡山は若い看護婦の名をよんだ。

「あんた、早く、お母さんを……向こうへ……早くね」

引き裂くようにきこえた。若い看護婦は狼狽しながら美弥子の方へきた。坂巻が切開部を縫合し終えた腔部に、ホルムガーゼがつっこまれている。若い看護婦の二人は、毛布で美弥子の下半身を包み、すばやく移動ベッドに寝かせた。

美弥子は、眠っていた。いや、眠っているのではなかった。半ば虚脱感の中で、山村の風景を見ていた。それは、六年ほど前に、夫の要助といっしょに行つた岐阜の山奥の村であつた。揖斐^{いひ}の村らしかった。遠くに飛驒の山波がみえた。白い一本道が川に沿うてまがりくねっていて、ふもとの森の中にすいこまれていく。山と山が襟を合わせたようにしてすばまる地点だつた。藁ぶき屋根が